

昔ある国に、罪人が逃げ出すと、その罰として気の荒い象に踏み殺させるという法律があった。しかし、罪人はいよいよ刑の執行が決まり死が目前に迫ると、いても立ってもいられなくなり、すきさえあれば逃げようとした。

じつとしていけば必ず殺されてしまうのだ。それならうまく逃げ出し、逃げおおせることができれば、生き延びることができる。たとえ気の荒い象に踏み殺されようと、それでもともとはないか。

死を前にした罪人は、みんなそのことを考えていた。

そんなある日のことであった。一人の罪人が、番人のすきを見て牢ろうを逃げ出した。

しかし逃げたことがすぐ分かり、番人は気の荒い象を放って、その男の後を追わせた。男は逃げ続けた。後ろからは象が迫ってくる。ドシンドシンと足音を立て、きばを突き出し、鼻を高く差し上げてぐいぐいと迫ってくる。

男は長い間牢につながれていたのも、じきに息が乱れ、足がもつれた。このままだともうすぐ象の大きな足に踏みつぶされてしまうに違いない。

と、その時、男の前に、古井戸がうまい具合に口を開けているのが見えた。

——ここへ逃げ込めば助かるかもしれない……。

身を隠すにはもってこいの古井戸だった。男はちようど古井戸の中に垂れ下がっている一本の草の根を見つけた。それは、いかにも頼りなげに細かった。だが男は必死だった。その根につかまると、古井戸の中へ体をすべり込ませた。象が鼻息も荒くすぐそばへ来るのとほとんど同時だった。

男はとにかく象の足に踏みつぶされることから逃れた。とはいっても、隠れた男が出てくるのを待って、象は古井戸の周りをうろろうと歩き続けていた。

——とにかく、これで一安心だ。

男は、ほっとして息を整えた。少し落ち着いてくると、古井戸の中の様子もだんだん分かってきた。ところがそのとたん、男はあっと声を上げた。

古井戸の底の方で、一匹の大きな毒へびが真っ赤な舌をちよろちよろ出し、男の落ちてくるのを待ち受けているではないか。

象から逃げることはできたが、今度は毒へびだ。男は下を見ると恐ろしいので、しつかりと草の根につかまって目をつぶっていた。しばらくそのままでいた。なにか音が聞こえてくる。

男は、そのかすかな音が上の方から聞こえてくるのに気づいて目を開けた。そして上の方に目をやった。

——つかまっている草の根元で、なにかが動いている。

男はじつと目を凝らした。それは、一匹の白いネズミだった。どこからか出てくると、カリカリと草の根元をかじり、またどこかへ消えていく。しばらくするとまた出てきてカリカリとかじり、

どこかへ消えていく。

こんなことが続けば、今にも細い根はちぎれてしまいそうだ。男はどうしようもなく、体がわなわなと震えてくるのを感じた。

井戸の底には毒ヘビが口を開けて待っている。外へ出れば象の足に踏み殺されてしまうだろう。かといってこのままじつと草の根につかまっても、ちよろちよろ出てくる白ネズミによって、必ずいつかは井戸の底へ真つ逆さまだ。男はどうすることもできず、あきらめて、ぽっかりと広がる空をながめていた。

と、その時だった。今まで気がつかなかったが、井戸のそばに生えていた大きな木の枝からぽとりとなにかが落ちてくる。それがたまたま、空を見上げた男の口の中へぼとりと入り込んだ。

「あれ、これは……」

男は思わず声を出した。

「甘い……」

男はなんともうれしそうな顔になった。それは枝を伝って落ちてくる木の蜜みつであった。蜜は男の口の中に広がり、そのおいしさは体中にしみ込んでいくようだった。

男は、今すぐにも自分の命が失われようとしていることさえ忘れ、じつと口を開けて次に落ちてくる甘い蜜を待ち受けるのだった。

話はここで終わる。

この話を通して、仏はこのようなことを教えてくれる。

牢とはこの世であり、罪人とは迷える人間のことだ。気の荒い象というのは、常に変化しているすべてのことであり、ふと見つけた古井戸とは、人間の住む家のことである。

井戸の底で待ち受けている毒ヘビは地獄そのものであり、細い草の根は人間の寿命のことだ。白いネズミとは、刻々と過ぎていく月日のことである。

人間がすべてをゆだねている寿命は、一日一日と細くなっていく。それはどうしようもない事実だ。いつか必ずそれは切れてしまう。ところがそれを知りながら、人間は上から落ちてくる甘い蜜を口に入れ、その甘さに、最も大切なことを忘れてしまっている。

甘い蜜というのは、世の中すべての誘惑であり、楽しくおもしろいことだ。人間はその蜜にうつつを抜かし、たちまち明日になれば、今日の自身の姿が存在しないということを少しも考えようとしない。

外には気の荒い象がいるぞ。井戸の底には毒ヘビだ。そして、人間のすべてをゆだねている草の根を白いネズミがだんだんかじっている。落ちるぞ。今に落ちるぞ。

さ、すぐ、なにをしなければならぬかを考え、多くの苦しみから離脱することに専心しなければならぬ。

(衆経撰雜譬喻八話)